

映画による態度変容についての研究 (7)

— テレビ視聴態度の形成 その4 —

岩手大学教育学部 石川桂司

はじめに

映画による態度変容について研究を続けている筆者は、1975年以来、児童のテレビ視聴態度の問題をとりあげ考察をすすめてきた。

1975年には、児童のテレビ視聴態度測定のための尺度を作成した〔4〕。以来、実際の視聴行動の一面としての視聴時間量（VH）を測定し、この視聴態度尺度値（VA）との関係や、この両者を規定する諸要因について分析を続けてきた。

また、1976年には東映教育映画部企画のもとに、児童の望ましいテレビ視聴態度を形成するための道徳教育用映画「テレビに泣かされたボク」（カラー20分）の製作に監修協力した。以後、この映画を使用して児童のテレビ視聴態度の形成をはかり、VA・VHを測定して態度変容の実態を明らかにしようとした。

これまでに行なったテレビ視聴態度形成に関する研究の概略は、次のとおりである。

1) その1 (1976)〔4〕

第Iにおいては、Thurstoneの等現間隔法によって、20項目からなるテレビ視聴態度測定尺度を作成した。そして、盛岡市内N小学校3～6年生304名を対象に、この尺度を使用して同時に視聴時間量を測定した。その結果、

(1)VAとVHの間に高い相関関係がある。

(2)テレビ視聴のピークは、小学校5年生から3～4年生に移行する若年化傾向を示していることが、VA・VHいずれの測定値からも明らかになった。

第II部においては、J小学校4年生226名を対象に、親子の対話の重要性を強調して正しいテレビ視聴態度の指導が必要なことを説いた社会教育映画「こわれたテレビ」（東映教育映画部作品、白黒26分）によって、態度変容の起ることを実証した。

2) その2 (1977)〔5〕

この研究の第I部では、児童のテレビ視聴実態を、VA・VHの2つの特性値でとらえ、この両者に性差、学年差、地域差、性格差、家庭の諸要因など、16の因子がどのように関係しているかを分散分析法で調べた。対象は、岩手県の都市・農村の各2小学校3～6年生1,242名である。

この分析によって明らかになった点は次のとおりである。

(1)全体的にVAとVHの相関関係が高い。

(2)都市よりも農村の子どもが、そして女子よりも男子のVA・VHが高く、地域差・性差の要因が大きく影響している。

(3)5・6年生よりも3・4年生のVA・VHが高い。

(4)知能・学力・性格（意志力）などが、VA・VHに大きく影響している。

(5)家庭の諸要因がVA・VHに影響している。とくに、母親が保育に専念しているか否か、テレビの見方について親がどのようにかかわっているかなどの影響が大きい。

(6)VH3時間・VA25000以上の長時間視聴児は、それ以下の子どもらと明らかに異なった集団を構成している。

1 問 題

さらに、VA・VHに対する諸要因のかかわり方も、他の子どもらに比べて大きく異なり、より複雑にかかわり合っていることが明らかになった。

この研究の第Ⅱ部においては、K小学校4年生127名を対象に、前述の道徳教育用映画「テレビに泣かされたボク」を用いて効果測定の実験を行い、映画群・非映画群のVA・VHの比較から、効果とその持続性を実証することができた。

3) その3 (1979) [6]

この研究では、研究その2 [5] の分析結果から、地域・家庭の要因がVA・VHに影響することに注目し、映画による視聴態度形成の効果に、これらの要因がどのようにはたらくかを分析した。

調査対象は、社会教育における放送利用実践に地域ぐるみで取り組んできた岩手県大東町の4小学校4年生199名と、非利用地域として岩手県東山町の2小学校4年生115名およびその家庭である。

分析の結果、明らかになった点は次のとおりである。

(1)全体として映画による態度変容が認められ、その効果は2週後・6週後まで持続する。

(2)長時間視聴児を対象とした分散分析結果から、VA・VHいずれに対しても映画の効果が主効果として、さらにVAに対しては地域・家庭の要因が主効果としてはたらく。VHに関しては、地域・家庭の諸要因が2因子・3因子の交互作用としてはたらく。

(3)「社会教育における放送利用学習に参加した経験の有無(両親の)」という地域的特徴をあらわす要因のはたらきは、子どもらの視聴態度形成効果に直接的に作用するよりも、「家庭におけるテレビの見方についての話し合いの有無」「家族の視聴時間量」「家族のテレビ学習利用習慣」など、他の要因とからみ合い、「触媒効果」として大きくはたらいている。

前述の研究その2・その3においては、映画「テレビに泣かされたボク」が児童のテレビ視聴態度を望ましく変容させ、しかもその変容を持続させることが認められた。

そこで、この映画のどのようなはたらきが児童の態度変容をもたらすのか、その変容の心理的メカニズムを、映画の構成と関連づけて考察しようとするのが本稿の課題である。

映画などのマス・メディアによるコミュニケーションを考える場合、メッセージの内容(この場合、映画の内容)が受け手とどのような関係をもっているのか、その関連度が重要な問題となる。

そこで、この関連度として「自我関与」の問題と、さらに関与のしかたの中でもとくに受け手(観客)が映画の中の人物と自分を同一的であると感じる「同一化」の問題を取りあげ、映画による態度変容過程を分析してみよう。

1) 「自我関与」について

藤原[9]によれば、自我関与とは個人にとって重大な関心のある事態に対してその個人がかかわりをもつこととされ、自我関与の強いコミュニケーションは、学習や態度形成に大きな影響を与えられている。

このことを映画によるコミュニケーションについてみると、戦後、占領軍総司令部が日本の民主化のために各県で実施したナトコ映画会でのフィルムと、国産の社会教育用フィルムの効果のちがいが明らかになる。

農村における家族関係の民主化をすすめるために、ナトコ映画でアメリカの家族生活を見せても、岩手の農山村の人々にはピンとこない。老夫婦と息子夫婦の間は「スープのさめない距離で」と言ってみたとこで、古い家族制度の色こく残っている日本の家庭で嫁と姑の問題に悩む農村の人々には、所詮、「われわれとは別の世界のアメリカでのごとく」であり、「他人事」「よそ事」に過ぎない。

い。

ところが、昭和20年後半から日本で製作された映画は、農村での嫁いびりを問題として数多く描き出し、人々に深い関心と感動を与え、問題を提起した。そこに描かれる世界は、観客にとって身近な素材であり、見ている嫁や姑や夫達に強い「自我関与」を起こさせる。こうした自分達の生活に身近な家族生活を描き最も関心のある内容を描いた映画をくり返し見た人々は、知らず知らずのうちに嫁いびりを改め、男尊女卑の悪習慣を改めていく。つまり態度変容に大きな効果があったのである〔3〕。

このようなナトコ映画と国産の社会教育映画にみられる効果のちがいは、映画の内容が、観客にとって自我関与を起させるものであるか否かによる。つまり、映画による態度変容過程を考察する場合、この「自我関与」の問題をまず第1に考えなければならない。

けれども、自我関与が強ければそれでいいというものでもない。

原岡の研究〔8〕によれば、感情的負荷をとまなう強い自我関与のある場合、そのメッセージによって、自己のもっている態度と同じものが攻撃されれば、自己防衛的機制が起る。そのために、むしろ自我関与の弱い人々の方に態度変容がみられたという結果もでてゐる。

2) 「同一化」について

強い自我関与を感じる映画を見る過程で、観客がその映画の中の人物に「同一化」を起すか否かが態度変容に大きく影響する。

そもそも「同一化」とは、フロイトによって提唱された概念で、子どもが親のもっている性格や行動特性などを自分に取り入れる無意識的過程であると言われる〔7〕。

そして、さらに広く「自分を他人または集団と同一的であると感ずる心理的機制」〔10〕ととらえる考え方もある。バンデュラは、社会的学習理論の立場から、他者の行動をモデルとして行動

に変化が生じる観察学習にモデリングという名称を与え、同一化する対象との強い情緒的結合関係を重視した〔7〕。

映画によるコミュニケーションの場合、観客は暗い部屋で一点のみ明るいスクリーンに注目を強いられ、そのスクリーンの中の人物や集団に対して、強い「同一化」を起しやすい。情緒的結合関係も成立しやすい。悲劇映画をみて涙を流すときの心理的メカニズムは、この同一化を示すものである。

マレッケは、その著書「マス・コミュニケーション心理学」〔2〕において、個人と個人の間に行われるパーソナル・コミュニケーションの場合に生じる「同一化」現象とマス・コミュニケーション過程で生じる「同一化」のちがいを論じている。

彼は、マス・コミュニケーションによる同一化の特徴として、同一化する対象の範囲が拡大化し多様化し得ること、さらに同一化の度合がパーソナル・コミュニケーションの場合よりも強く、観客は自意識に制限されることなく、対象人物に「なりきる」点をあげている。

映画の場合に、このマレッケの指摘をあてはめてみる。映画を見て涙を流している観客の心理的メカニズムは、暗い空間で一ヶ所明るいスクリーンの世界の中に没入し、その悲劇の中心人物と自分自身と同一化し、自分を放棄してスクリーン上の人物になり切ってしまうのである。

このような映画による「同一化」を取りあげた研究に、Kishlerの論文〔1〕がある。

彼は、カソリック牧師の生涯を描いた劇映画「王国の鍵」を用いて大学生を対象に、宗教に関する寛容の態度と知識獲得の実態を調べた。そして、牧師という職業に対する尊敬の念の高低と、さらにカソリックの牧師に対する同一化の度合がどのように影響するかを調べた。その結果、知識・態度ともに、高い尊敬の念をもっているグループが大きく変わることに、同一化しているカソリック教

徒の方が、非カソリック教徒よりも大きい知識獲得を示すことを明らかにした。しかし、いずれも有意差を示すまでには至らなかった。

このKishlerの研究から得られる知見は、観客が既にもっている態度や立場、さらに映画の主人公に対して観客のいだいている態度や構えが、映画の効果に影響するということである。

さらにまた、前述のマレッケは、「同一化」と関連させて「投射」projectionの重要性を指摘している。

マレッケによると、投射とは、個人が自分自身に都合の悪い、あるいは望ましくない欲求や内面的なことがらを、外に向かって移しかえることをいう。そして、この移しかえられ「外在化」externalizationされたものが、投射している本人に外的なできごととして再び向い合い「対象化」gegenständlich = objectificationされることが重要であるという。

以上、考察をすすめてきた「自我関与」「同一化」「投射」あるいは「対象化」という諸概念を、この映画による態度変容の考察に導入してみよう。

まず、前述の農山村の家族関係を考察した面岸研究〔3〕では、嫁いびりの激しい山村の人々を対象に、自分達の生活に全く身近で強く自我関与のはたらく嫁いびりの劇映画を、6回の大衆映画会で上映した。

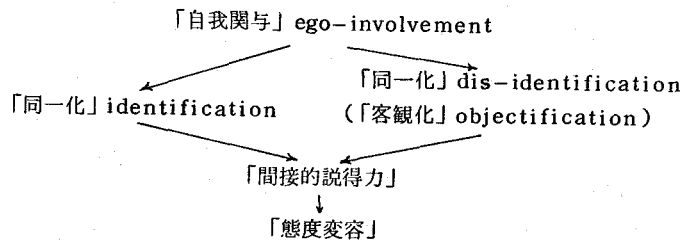
観客の中の嫁達は、映画の中の嫁の姿に終始自分を同一化し、涙を流さんばかりに見入っている。一方、姑達は、映画の前半の農村家庭の生活場面に引き込まれ、その中の同じ老婦人に同一化を感

じる。ところが、嫁いびりのようすが喜劇風に描かれ出すと、そのおかしさ・おもしろさに笑いながらも、自分と同じような意地悪ばあさんの嫁いびりのようすを、きまり悪そうに苦笑いして見ているのである。つまり、自分にも「思いあたるふし」があり、自分と映画の中の姑の姿を無意識的に比べているのである。

この比較するという心理現象は、映画の中の人物に「なりきってみる」という同一化とは全く別のはたらきであり、むしろ「脱同一化」とでもいうべき現象とも考えられる。

つまり、さしさわりのない場面では「同一化」が行われ、都合の悪い場面では自分自身を振り返るとき「脱同一化」の心理がはたらくものと思われる。マレッケはこれを「投射」という概念で説明しているけれども、この場合むしろ「脱同一化」とよんだ方がいい。さらに「脱同一化」の中の「対象化」もしくは、第三者的に客観的な立場で離れて見ようという「客観化」のはたらきと表現した方が、より適切な説明概念と考えられる。

この「同一化」と「脱同一化」、そしてその中の「客観化」という一見相矛盾する心のはたらきが原因で、映画をとおしての説得を生じ、態度変容が起ると考えた。そして、この説得は、個人対個人の直接的説得ではなくて、映画製作者の意図や社会教育関係者の願いがスクリーンをクッションボードにして、間接的に観客にはたらきかけるものである。ここに、映画のもつ「間接的説得力」があると考えた。



第 1 図

このような図式的な仮説が、映画による態度変容のメカニズムとしてはたらいっているのではないだろうか。

この研究で用いられた映画「テレビに泣かされたボク」も、後に詳述するように、この仮説的理論によって構成されている。

こうした映画の構成と観客の心理的反応を関連づけて、態度変容のメカニズムを明らかにしようとするのが本研究の課題である。

2 研究のねらい

家庭における児童の望ましいテレビ視聴態度形成を目的として製作された道徳教育用映画「テレビに泣かされたボク」によって、児童の視聴態度が変容するかどうか、その変容の心理的過程を、映画の構成とくにシーケンスと対比して明らかにする。

3 使用した映画とその内容・構成

道徳教育用教材映画「テレビに泣かされたボク」(東映教育映画部作品、カラー20分、石川桂司監修)

小学校3～6年生対象の作品で、「時間を大切にし、きまりのある生活をする」をねらいとする主題の場合、中心資料として利用できる教材である。

(内容)

・テレビに振り回される生活を送る俊夫

小学校4年生の俊夫は、朝起きるとすぐにテレビのスイッチを入れ、朝食もテレビを見ながら食べるテレビっ子である。学校から帰ってくるとかばんを放り出し、何時間でもテレビにしがみつ়。1にテレビ、2にテレビ、3・4もテレビで、5に勉強の毎日であった。

・まに合わなくなるお面づくり

俊夫はお楽しみ会の劇で使うお面を、日曜日迄

に作ることを友達と約束するが、まだ日があるからとお面づくりをほうり出し、テレビにしがみついていた。約束の日が翌日に迫っても、学校から帰ってきてテレビを見ていた。

夜になり、再びお面づくりを始めても作業は進まず、俊夫は絶望的な気分になり、目からは大粒の涙が伝い落ちる。その時、別の俊夫(俊夫の良心)があざ笑うように現われる。そして「もっと自分できまりをつけ、テレビは見たいものだけにすれば」と忠告するが、俊夫は「テレビはどれを見てもおもしろいので、次から次に見たくなるのが人情さ」と反発する。

・お面づくりに協力する家族

11時を過ぎたので、両親より寝るようにいわれた俊夫は、作業が進まずいららしていたので、「約束だから作るのだ」と言い、激しく泣き出す始末である。両親も、今更いってもしようがないとあきらめ、母親は新聞紙の重ね張りをし、姉はお面をかわかし、俊夫は寝ぼけまなこで虎のしま模様を絵の具でかき、父親はニスで上塗りをするなど、家族の共同作業が始った。父親がニスをかわかす頃には夜もふけ、俊夫をはじめ姉も母までも、コックリコと居眠りをはじめめるのだった。

・自分で作らないお面に恥じる俊夫

あくる日曜日の午後、徹夫の家に素江と俊夫と芳子が集った。芳子は半成品のお面をみんなに見せ「1日、待ってほしい」とあやまる。徹夫と素江は「みんなで手伝って作ってしまえば簡単だ」というが、芳子は「自分の作ったものでなければ」とことわる。

俊夫は突然「おれ、また来る」と虎のお面を持って走り出し、お面を小川に投げ入れてしまう。川下で俊夫を捜していた徹夫たちがそのお面を拾いあげ、「こんなによくできたお面が台なしではないか」となじる。

俊夫はそのお面を奪い取り「おれのお面じゃないんだ」とめっちゃめっちゃに踏んづけてしまう。そして「テレビばかり見ている自分で作れず、家族

の人達が殆ど作ったものだ。芳子さんのように正直にあやまれなかった」と反省すると共に、友達にもわびた。

• 視聴番組を決めるテレビ同盟

だれもがテレビを見過ぎた経験があるので、テレビ同盟をつくり、毎日、2時間ぐらいをめぐりに見たい番組を4人がノートに書き出し、各自で守り合おうと、素江が提案する。

約束をやぶれば、今日の俊夫のお面みたいに、自分で自分がいやになってしまうから、しっかり守り合おうと申し合わせた。

家に帰った俊夫は、同盟で約束したテレビ番組を見ていた。別の俊夫（俊夫の良心）が心配そうに眺めていると、番組を見終わった俊夫はすっと立ちあがり、パチッとスイッチを切り、「さあて、勉強、勉強」と、満足そうな表情で鉛筆をにぎり、勉強を始めるのであった。

(シークエンス構成)

シークエンス毎の内容構成を示したものが、第1表のとおりである。

第 1 表

No	シークエンスの内容	時間
1	テレビを見すぎてしまい作れなかった半成品のお面に当惑して泣いている俊夫。その俊夫を「だらしねえなあ」と批判しているもう1人の俊夫(2役、俊夫の良心をあらわす架空の人物)。	1分12秒
2	(回想)友人徹夫の家の玄関前、お楽しみ会の劇のお面づくりについて、楽しそうに約束している4人組。俊夫「ボクの虎のお面、うん、大体は……できていよ」とうそをつく。	36"
3	(回想)勉強機の横でお面づくりを始める俊夫。間もなくテレビを思い出し、「5時からゴリラマンが始まるな、チョッとだけ」と立っていく俊夫。	48"
4	(回想)テレビの前、次々とチャンネルをまわして、ずるずるべったりテレビを見続けている俊夫。	29"
5	お面を放り出し、呆然と天井を見ている俊夫。「テレビばかり見ていて、朝なんかみろよ」と批難しているもう1人の俊夫。	36"
6	(再び回想)朝、俊夫のベット、入れかわり立ちかわり俊夫を起しにくるお姉さんとお母さんのようす。	29"
7	(回想)テレビを見ながら、のろのろとパジャマを服に着がえている俊夫とそれを叱るお父さん。	25"
8	(回想)テレビを見ながらグズグズと朝食を食べている俊夫。	22"
9	「ホントにだらしがないなあ」と批難しているもう1人の俊夫(お母さんが入ってくる気配でパッと消える)。 「もう寝なさい」とお母さん。 「けいこが間に合わないんだよ」と孤独なお面づくりの作業を続ける俊夫。 「もう11時過ぎたぞ! もう寝るんだ!」と叱りつけるお父さん。泣き出す俊夫。 だらしのない俊夫をめぐって言い合いする両親。 「今さらしかたがない。手伝って作ってやらなけりゃ」とお父さん。	2' 03"
10	お面づくりを手伝っているお母さん。	15"
11	お面をかわかしているお姉さん。	11"
12	あくびをしながらお面に絵の具をぬっている俊夫。	12"
13	ニスで上ぬりをしているお父さん。	11"

No	シークエンスの内容	時間
14	コックリコックリ居眠りをしているお母さん、お姉さん、俊夫の3人。	5秒
15	扇風機やストーブでお面をかわかしているお父さん。	9"
16	日曜日の約束の時刻、徹夫の家。できあがったお面をもって俊夫と芳子を待っている徹夫と素江。	6"
17	道端の土手に1人ポツネンと坐って、まだニスのかわかないお面をながめている俊夫。それを苦笑しながら見ているもう1人の俊夫。	27"
18	徹夫の家の庭先。お面をもってかけつける俊夫。 半成品のお面をもってかけつけ「ゴメンナサイ、もう1日待って！」とあやまる芳子。 「困るなあ、……手伝って作ってしまおうよ」と言う徹夫と素江。 「でも自分で作ったものでなければ、……。悪いけどそうさせて」とあやまる芳子。 はっと気づく俊夫。「ボク、またくる」と言って逃げ出すようかけ去る俊夫。	1' 12"
19	全速力で駆ける俊夫。	23"
20	橋の欄干にもたれかかってお面をブラブラさせながら考え込む俊夫。 「みんなに悪いぞ！」と話しかけるもう1人の俊夫。	22"
21	別の道を俊夫を探して歩く3人。	18"
22	橋の欄干にもたれて考え込んでいた俊夫が、思わず手からお面を放す。 川の流れて落ちていくお面。驚くもう1人の俊夫。	4"
23	川面を流れていくお面。	48"
24	お面を追いかけて、橋の上から走り去るもう1人の俊夫。	3"
25	お面が流れていく小川。	22"
26	俊夫の名を呼びながら探し続ける3人。	8"
27	浅瀬に入って流れてくるお面を拾おうとしているもう1人の俊夫。 土手にあらわれた3人を見てパッと消えるもう1人の俊夫。お面を拾おうとする3人。	24"
28	ぬれたお面を手下げながら俊夫を探し歩く3人。	13"
29	お宮の広場にひとり坐り込んでいる俊夫。 俊夫を見つけて、「折角のお面、台無しだぞ！」とつめ寄る3人。 そのお面をいきなり奪い取って目茶目茶に踏みつけてしまう俊夫。 「お父さん、お母さん、お姉さんが殆ど作ったんだ、ボクのお面じゃないんだ」と俊夫。 俊夫「俺、簡単にできると思ってテレビばかり見ていたんだ。」 俊夫「俺、キミ（芳子）のように正直にあやまれなかったんだ。」 芳子「わたしだって、ついテレビに無中になって……。」 テレビの見方について、困っている経験を話し合う4人組。 「ねえ、テレビ同盟を作ろう」「4人で約束をして見よう」「ノートを買って約束をきめよう」 「お楽しみ会の劇のけいこはそれからやろう」と広場を立ち去る4人。	5' 25"
30	テレビを見ている俊夫。 エンドミュージックのあと、「パッ」と言ってスイッチを切る俊夫。	45"
31	「さあて、勉強・勉強と」と言って、満足そうな表情で勉強を始める俊夫。(エンドマーク)	33"

4 作業仮説

1) 映画「テレビに泣かされたボク」によって、視聴態度尺度値 (VA) と視聴時間量 (VH) が減少し態度変容が認められるだろう。

2) 映画による変容過程では、子ども達が映画の中に自己を発見し同一化している前半の段階から、主人公俊夫が自己葛藤を起す後半のシーケンス (No. 20以降) で見方が変化するだろう。これらのシーケンスに態度変容のポイントがあるだろう。

2) 使用した反応分析装置

NEC TM-505

3) 反応分析の際に与えたインストラクション

- 映画を見ながら「俊夫はほんとうにえらいなあ」と思ったところで□のボタンを押しなさい。
- 映画を見ながら「俊夫はほんとうにだめだなあ」と思ったところで◇のボタンを押しなさい。
- 映画を見ながら、えらいともだめだとも思わなかったなら△のボタンを押しなさい。

5 調査対象

盛岡市立上田小学校 4年生 2学級 60名

7 調査結果とその考察

6 調査手続

1) VA・VHの変化

2回にわたる調査にあらわれた平均VA・VHを示したものが、第2～5表である。

第2表は調査対象全児童についての変化を示したものであり、第3表はt検定でその有意性を調べた結果である。

また、調査対象全児童の75%を占める長時間視聴児 (事前調査のVHが3時間以上) のみについて、VA・VHを比較したのが第4・5表である。

1) 日程

	調査内容
昭和53年2月24日(金)	事前調査 VAとVHの調査
同年3月2日(休)	映画上映と反応分析装置による調査・VAの調査
同年3月3日(金)	事後調査 VHの調査

第2表 全児童のVA・VHの比較

	事前調査			事後調査		
	男	女	計	男	女	計
児童数	30	30	60	30	30	60
平均態度尺度値	2.4594	2.4791	2.4692	2.2646	2.1746	2.2196
標準偏差	0.79	0.77	0.78	0.91	0.88	0.89
変動係数	0.32	0.31	0.32	0.40	0.40	0.40
平均視聴時間量	4.18	3.59	3.89	3.43	3.25	3.34
標準偏差	1.41	1.83	1.66	1.47	1.47	1.47
変動係数	0.34	0.51	0.43	0.43	0.45	0.44

第3表 全児童のVA・VHの差の検査

	男		女		計	
	VA	VH	VA	VH	VA	VH
t	0.8724	2.5881	1.4019	0.7853	2.2691	2.6964
	∇	*	∇	∇	*	**

第4表 長時間視聴児のVA・VHの比較

	事前調査			事後調査		
	男	女	計	男	女	計
児童数	24	21	45	24	21	45
平均態度尺度値	2.3986	2.6009	2.4930	2.2647	2.4466	2.3496
標準偏差	0.74	0.62	0.69	0.90	0.80	0.86
変動係数	0.31	0.24	0.28	0.40	0.33	0.37
平均視聴時間量	4.67	4.45	4.57	3.80	3.85	3.82
標準偏差	1.13	1.44	1.29	1.37	1.28	1.33
変動係数	0.24	0.32	0.28	0.36	0.33	0.35

第5表 長時間視聴児のVA・VHの差の検定

	男		女		計	
	VA	VH	VA	VH	VA	VH
t	0.5499	2.5747	0.6833	2.6891	0.8613	2.6649
	∇	*	∇	*	∇	**

これら4つの表から明らかにされたことは、VA・VHとも全体的に減少傾向を示し、とくに、第3表に示されているように、全児童のVA・VHに5%と1%レベルの有意差があるということである。

このように、映画を見た直後にVH・VAが減少していることから、映画「テレビに泣かされたボク」の効果について、仮説1)が検証されたことになる。

2) 映画のシーケンスに対応した反応の分析

映画「テレビに泣かされたボク」の製作にあたって留意した点は、次のとおりである。

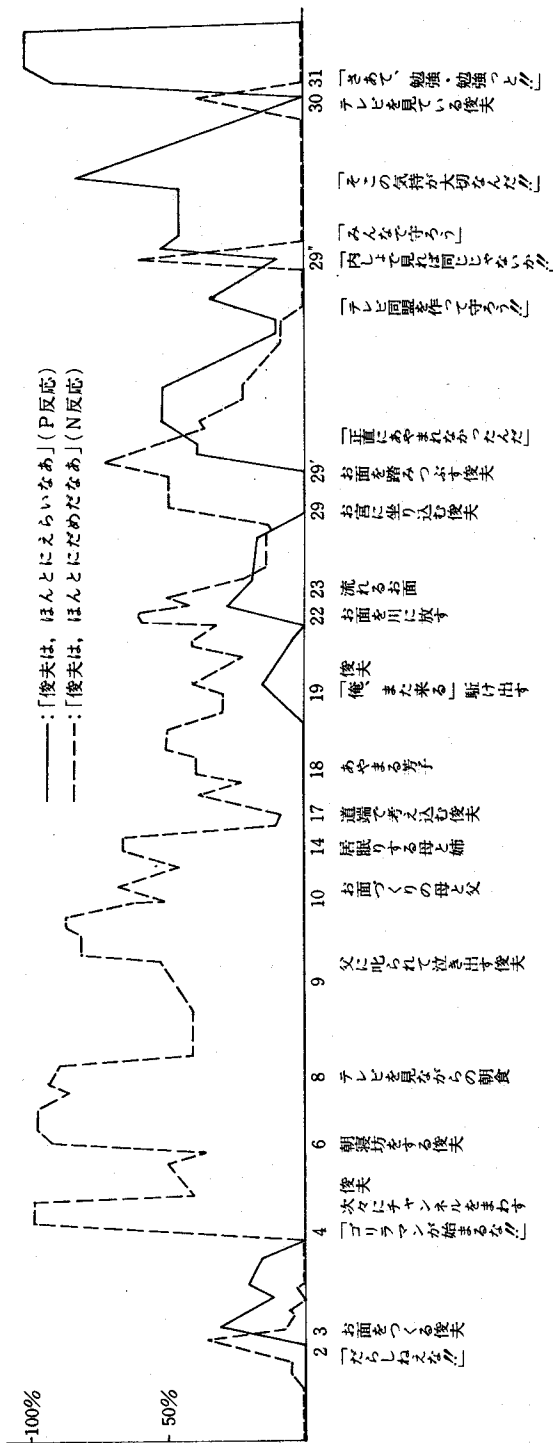
受け手の子どもらと同じ小学校中学年児童の生活、日常化しているテレビとの生活を描くことによって、「自我関与」をもたらす。そして、お面づくりをする俊夫、テレビを楽しむ俊夫に「同一化」を感じる。と同時に、テレビにおぼれる俊夫をいつも冷静に客観的にみて批判するもうひとりの俊夫(二役で俊夫の良心をあらわす)を描く。それによって、受け手が主人公俊夫の中の二面性を理解できるため、感情的負荷をおぼえずに「脱同一化」をはかれるように工夫した。

この映画を見ながら、「俊夫はほんとうにだめだなあ」と感じたシーケンス(negativeな反応：点線)と「俊夫はほんとうにえらいなあ」と感じたシーケンス(positiveな反応：実線)への各反応を示したものが第2図である。

20分の映画全体をとおして言える傾向は、前半はnegativeな反応が多く後半はpositiveな反応が多いことである。これは、映画の内容構成からもわかるとおり、前半ではテレビにおぼれふりまわされている主人公俊夫を描き、後半ではひとつの失敗を契機に悩み反省してテレビの見方を改めた俊夫が描かれていることから当然予想された結果ではある。

けれども、こうした全体的な流れの中で、その反応をより細かく分析し、とくにこの映画に対する反応を作文法(感想文)で調べた他の調査結果(注1)と関係づけて分析してみると、映画を見ての変容過程がさらに明らかになる。

感想文を読んで気づくことは、調査対象となった4年生児童が、この映画の内容に強い自我関与を示していることである。とくに導入部で描かれているお楽しみ会の劇のためのお面づくりや、楽



第2図 反応分析装置による分析

しようにテレビに見入る主人公俊夫の生活に身近さを感じ、強い関心と興味を示す。

これが回想場面になると、テレビに夢中になっている俊夫のようすに「だめだなあ」と感じながら「身につまされ」「ボクと同じだ」「今のわたしの生活と同じだ」と自己発見し「同一化」を感じる。こういったnegativeな反応(N反応)は、シークエンスNo.4からNo.8の途中まで、100%近くの子どもに見られる。そしてNo.29まではN反応が続く。

これに対して、「俊夫はえらいなあ」と感じるpositiveな反応(P反応)を見てみよう。

前半部におけるP反応は、回想場面の最初の部分で、俊夫が一生懸命にお面を作る場面のみである。これ以後、No.19までP反応は見られない。

シークエンスNo.19は、芳子の「自分の作ったお面じゃなくちゃ……」ということばに己れをふり返り、テレビのためにお面づくりが間に合わず家族みんなに手伝ってもらった自分を恥かしく思い、その場から逃げ出す場面である。

このあと、自己反省から自己否定・自己葛藤を起させる場面が続く。

自己を亡失し思わずお面を川に落とす場面(No.22)、そのお面が川面を流れていくアップの場面(No.23)、そして自分自身が厭になりその気持をお面を踏みつぶすことであらわす場面(No.29')へと続く。

こうしたNo.19・23・29'の場面でP反応を示している子どもは、映像理解力の高い児童である。そのために、自己反省・自己葛藤という映画内容の意味を充分にくみとっているのである。自分らと同じという「同一化」と共に、その反面、自己葛藤を起している俊夫を客観的に見て理解するという「脱同一化」の心理反応を示しているのである。

反対に、同じお面を川に落とす場面(No.22)、自己嫌悪のあまりせきつくったお面を踏みつぶす場面(No.29')に対して、N反応を示している児童も多い。これらの児童は、映像の背後にあるシン

ボライズされた内容を読みとることができずに、お面を川に落としたり踏みつぶしたという行動面を皮相的にとらえてN反応を示しているのである。

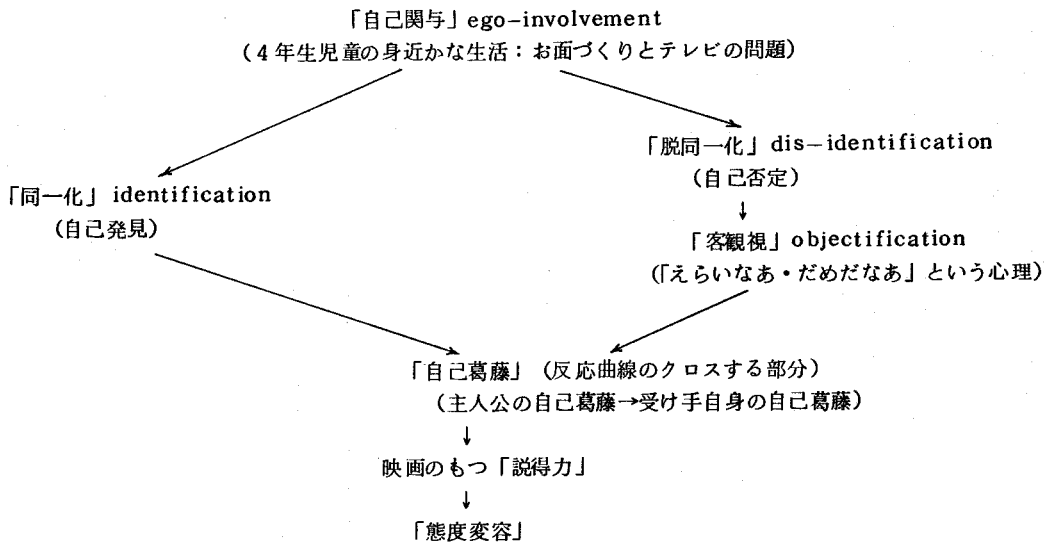
次に、映画全体の中で、N反応のみの部分からP反応があらわれはじめるNo.19以降の展開、そしてN反応とP反応が交差するNo.23・No.29は、主人公自身が強い自己葛藤を起す場面である。

これが、「ボクの姿に似ている。この映画を見てボクもこれからテレビには時間のけじめをつけて、見すぎないように努力しようと思った」（注

2）という反応に至らしめる。つまり、「同一化」と「脱同一化」のからみ合うポイントとなる場面であると見ることができる。

これらの点は、前記の感想文による調査結果と照合して判断されるのである。

このような映画の構成と児童の反応についての考察から、映画によってもたらされる視聴態度の無意識的な変容過程を図示すると、第3図のとおりである。



第3図

以上のような反応分析結果から、仮説2)が検証されたのである。

あ と が き

第3図の関係図は、今回調査した全児童の反応を集団として分析した結果から導き出した仮説的結論である。

今後、VA・VHが明らかに減少した児童個々の反応を分析することによって、そしてまた、その心理的変容を面接法・内省法などの方法を駆使して分析することによって、この仮説を更に検証

していかなければならない。

なおこの研究は、放送文化基金より研究費を助成された「テレビ視聴態度研究会(代表石川桂司)」の研究「児童のテレビ視聴態度に関する研究」の一部として実施したものである。

注1: 上田小学校の他の2学級50名を対象として、作文法による感想文調査を実施し、さらに同じ盛岡市内の桜城小学校411名を対象に同じ調査を実施したが、その結果については、他の論文で詳しく分析報告する予定である。

注2: 前記感想文から。

参考文献

- 1) Kishler, J. P ; The Effect of Prestige and Identification Factors on Attitude Restructuring and Learning from Sound Films, Pennsylvania State College, SDC 269-7-10, 1950
- 2) Maletzke, G. ; Psychologie der Massenkommunikation-Theorie und Systematik-, Verlag Hans Bredow-Institut, Hamburg, 1963 (NHK放送学研究室訳, 日本放送出版協会, 1965)
- 3) 石川桂司;へき地の視聴覚教育, 33-57, 日本映画教育協会, 1964
- 4) 石川桂司;映画による態度変容についての研究(4)-テレビ視聴態度の形成 その1-, 視聴覚教育研究7, 1-20, 日本視聴覚教育学会, 1976
- 5) 石川桂司;映画による態度変容についての研究(5)-テレビ視聴態度の形成 その2-, 岩手大学教育学部研究年報37, 247-268, 1977
- 6) 石川桂司;映画による態度変容についての研究(6)-テレビ視聴態度の形成 その3-, 視聴覚教育研究10, 1-34, 日本視聴覚教育学会, 1979
- 7) 柏木恵子;同一視, 新教育心理学事典, 589-590, 金子書房, 1977
- 8) 古賀行義;教育心理学小辞典, 協同出版, 1972
- 9) 原岡一馬;態度変容の社会心理学, 73-87, 金子書房, 1970
- 10) 藤原喜悦;自我関与, 新教育心理学事典, 296, 金子書房, 1977